

アビナダイとノア^{おう}王

だい14しょう



ゼニフはニーファイ人の正しい王でしたが、年をとったので、むすこのノアに王のくらをゆずりました。(モーサヤ11：1)



ノアは父のようによい王ではなく、わるい王でした。神のいまいしめをまもりませんでした。(モーサヤ11：2)



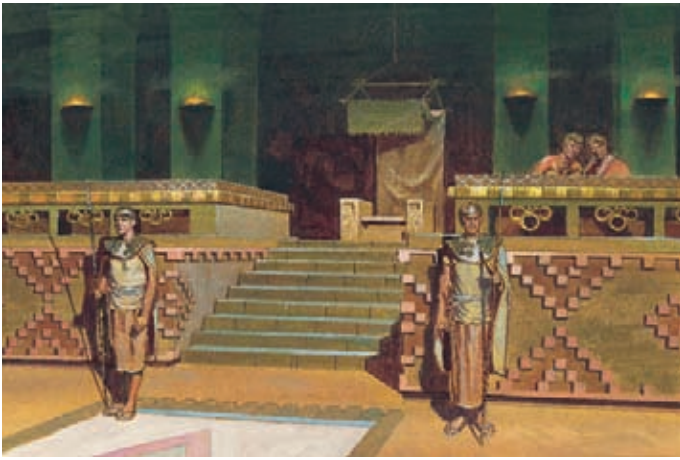
ノアはたみから金やぎんをとり立てました。たみはまた、こくもつやかちくもさし出さなければなりません。(モーサヤ11：3)



ノア王はなまけもので、ひつようなものはすべてたみからとりたてればよいと考えたのです。(モーサヤ11：4)



王は父ゼニフがえらんだよいさいしたちをやめさせて、あくじを教えるわるいさいしたちを立てました。(モーサヤ11：5-7)



ノア王はおうざのある広いきゅうでんや、りっぱなたてものをたくさんたて、うつくしい木や金ぎんでかざりました。(モーサヤ11:8-11)



王はたみからとり上げたざいかに心をうばわれ、さいしたちとともにさけをのんだり、わるいことをしたりしてくらしました。(モーサヤ11:14-15)



神はノア王のたみのもとへ、アビナダイというよげんしゃをつかわされました。アビナダイは、もしくいあらためなければ、たみはレーマン人のどれいにされるとけいこくしました。(モーサヤ11:20-22)



ノア王はアビナダイのことばを聞いておこり、「アビナダイをころすから、かれをつれて来い」と人をやりました。(モーサヤ11:27-28)



王の前につれて来られたアビナダイは、王とさいしたちからたくさんのしつもんをあびせられました。かれらは何とかしてアビナダイにまちがったことをいわせようとしたのです。(モーサヤ12:18-19)



アビナダイはいさましく答えました。神がたすけてくださることを知っていたからです。さいしたちはアビナダイの答えにおどろきました。(モーサヤ12:19)



王はおこって、さいしたちにアビナダイをころしてしまえとめいじました。アビナダイが言いました。「わたしにさわるな。わたしに手をかけるなら、神があなたたちをほろぼされるであろう。」(モーサヤ13：1-3)



アビナダイはしめいをはたせるように、せいれいにまもられていました。アビナダイの顔が、まばゆくかがやいています。さいしたちは、こわくてアビナダイに手が出せません。(モーサヤ13：3、5)



神から力をうけて、アビナダイはたみに、王やさいしたちのあくじについて話し、神のいましめをよんで聞かせました。(モーサヤ13：6-7、11-24)



イエス・キリストがこうたんされ、キリストによって人びとがくいあらため、ふっかつし、神とともにすむことができることも話しました。(モーサヤ13：33-35；15：21-23)



「あなたたちは自分のつみをくいあらためて、イエス・キリストをしんじなければならぬ。そうしなければすくわれぬであろう。」(モーサヤ16：13)



一人のさいしをのぞいてぜんいんが、アビナダイの言うことをしんじませんでした。ノア王がアビナダイをころせとめいじたので、アビナダイはとらえられ、ろうやに入れられてしまいました。(モーサヤ17：1、5)



アビナダイのこばをしんじたさいしは、アルマという人^{ひと}でした。アルマはノア王^{おう}に、アビナダイをゆるしてくれるようにたのみました。(モーサヤ17:2)



王^{おう}はおこってアルマをおい出し、しもべたちに後^{あと}をおわせてころそうとしました。アルマはにげてすがたをかくしたので、しもべたちはアルマを見うしなりました。(モーサヤ17:3-4)



3日^かたって、ノア王^{おう}はアビナダイを自分の前^{まへ}につれ出させ、こう言^いいました。「自分が言^いったことを、わたしとわたしのたみの前^{まへ}でとりけせ。」(モーサヤ17:6, 8)



「言^いったことをのこらずとりけさないなら、おまえをころしてやる。」(モーサヤ17:8)



アビナダイは自分がしんじつを語^{かた}ったことを知^しっていたので、神^{かみ}が自分をおつかわしになり、話^{はな}すようにおめいじになったことをとりけすよりは、よろこんでし^しのうと思^{おも}いました。(モーサヤ17:9-10)



アビナダイをころすめいれいが王^{おう}から出^でました。さいしたちはアビナダイをとらえて、むちでうち、火あぶりにします。アビナダイはしめ前^{まへ}に、ノア王^{おう}もまたやきころされるであろうと言^いいました。(モーサヤ17:13-15)



たみの中には、王にはんたいするものもいて、王をころそうとしました。レーマン人のぐんもノア王とそのなかまとたたかおうとおそって来ました。(モーサヤ19：2-7)



ノア王となかまはにげました。レーマン人がおいついてなかまをころしはじめると、王は男たちにつまや子どもをすててレーマン人からにげよとめいじたのです。(モーサヤ19：9-11)



しかし、男たちの多くは、かぞくをすててにげようとはせず、レーマン人のとりこになりました。(モーサヤ19：12, 15)



ノア王といっしょににげたもののほとんどが、つまや子どもをおきざりにしたことをこうかいしました。かぞくやなかまのもとに帰って、まもってあげたいと思ったのです。(モーサヤ19：19)



ノア王はそれが気に入らず、帰ってはならないと言いました。(モーサヤ19：20)



おこったかれらは、ノア王をやきころして、かぞくのもとに帰りました。アビナダイのことはじょうじゅしたのです。(モーサヤ19：20, 24)